

十六世紀後半の地中海とネーデルラント

——胡椒貿易を中心に——

栗原福也

一 ネーデルラントの叛乱とアントウェルペン

フェリーペ二世がその父カール五世からネーデルラントの統治を引き継いだのは一五五五年であった。翌五六年、彼はスペインとその植民地とともに、ナポリの支配権を譲り受け、スペイン国王フェリーペ二世となったが、そのネーデルラント統治はやがてこの地方の住民の離反を招き、ついにオランダの独立へと帰結した⁽¹⁾。ネーデルラント住民の叛乱の原因は、この地方に固有の自治意識の強さという特殊事情やカール五世の財政に対して莫大な負担をしたという自負の意識などを顧慮することなく、フェリーペ二世が政治的宗教的な統制を強行したことに

あると思われる。宗教的自由が国際商業の繁栄に不可欠の要因であるという信念はアントウェルペンを初めとするこの地方の商業諸都市の市民のあいだに深く滲透しており、そのような精神的風土のうちにカルヴィニズム、ルター派、再洗礼派などの信仰が広く普及していた。したがってフェリーペの新教弾圧政策の強化は新教徒のみならずカトリックの市民のあいだにさえ深刻な不安を生んだのである。叛乱の発端となった一五六六年における貴族の同盟とブラッセル政府への「請願書」提出にもアントウェルペンのカルヴァン教会の代表が参加していたし、続いて始まるカルヴァン派の野外説教はカルヴィニストのみならず不満を懐く広範な大衆を巻きこみ、アン

(17) 十六世紀後半の地中海とネーデルラント

トウエルペンのごときは三万人がこれらに参加し、ついに聖像破壊、教会、修道院の略奪を行う民衆運動へと発展した。

フェリーベ二世の異端弾圧が民衆による聖像破壊というデスペレートな反抗運動として燃え上ったのは民衆の経済的窮迫にあった。経済的窮迫の直接の原因は消費税の重圧や十六世紀後半各国を襲った物価騰貴に加えて、スウェーデンとデンマークの戦争（一五六三—七〇年）によるズント海峡閉鎖がバルト海からの商品ことに穀物輸入の杜絶あるいは減少をもたらし、穀価高騰と失業を起こしたからであろう。⁽²⁾ しかしながら、これらの原因の背後にはアントウエルペン市場の衰退という一層注目すべき事実が存在したのである。⁽³⁾

世界市場アントウエルペンの繁栄を支えた三つの柱はイギリスからの毛織物、南ドイツの銀・銅・麻織物、ポルトガルのもたらず胡椒であったといわれる。⁽⁴⁾ 一五五七年、フェリーベ二世の財政破綻（国王の債務に対する全面的な支払停止令）によってアントウエルペン金融市場は癒しがたい打撃を受け、翌五八年、エリザベス一世の即位とともに、プロテスタント国家イギリスとスペイン

の国際関係は緊張し、一四九六年に締結された大条約 Magnus Intercursus 以来絶えることのなかったマーチヤントIIアドヴェンチャラーズとアントウエルペンの親密な関係も六三年から六四年にかけてついに通商関係を断絶するという危機にまでたち至った。⁽⁵⁾ 加えてイギリス毛織物の輸出自体が十六世紀の中葉以降、長い停滞の局面に突入したことはすでに周知のことである。

しかしながら、十六世紀中葉にアントウエルペンの市場を襲った深刻な危機はイギリス毛織物輸出の減退だけではなかった。すなわち一五五〇年以後、ヴェニスとレヴァントを結ぶ胡椒貿易が復活してポルトガルの胡椒貿易を圧倒し、しかもいちじるしく輸入量の減少したポルトガルの胡椒はいまヤリスボンから直接地中海に流入し、ヴェネツィアを経由して南独に到着した。一五四九年にはアントウエルペン駐在の王室商務官は廃止され、この市におけるポルトガル胡椒取引は明らかに最盛期を終えたのである。南ドイツへの胡椒流入ルートの転換に際して、南ドイツ産の商品もいまやアルプスを越えて直接地中海へと逆の方向に流出し始めた。そのみではない。「胡椒のあるところへ銀は流れる」(Arzento va dove

le li pipe) のであつて、アントウェルペンに流れてい
た新大陸産の銀の一部はいまや地中海に向い、地中海の
商業を活況に導いた。ジェノアの金融資本家は、フッガ
ーの退場のあとを受け、十七世紀前半アムステルダム資
本家にその地位を明け渡すまでヨーロッパの金融界に君
臨し、一五八〇年代に入るとイタリアはアントウェルペ
ンを凌いでヨーロッパ最大の金融市場になつた。

一五七二年、海乞食がゼーラントの諸都市を占拠して
アントウェルペン港の出口であるスヘルデ河口を抑え、
一五六八年以降イギリス私拿捕船のスペイン船舶に対す
る攻撃は公然たるものになつた。⁽⁸⁾六七年からハムブルク
に移動したマーチャントリアドベンチャラーズの指定市
場は七三年ふたたびアントウェルペンに戻つたが、もは
や以前の繁栄を取り戻すことはなかつた。七六年「スベ
イン人の劫略」によつて、六百戸が焼かれ、市民数千人
が虐殺された。市の商業中心地は徹底的に掠奪され、被
害額は五百万ギルダーの巨額に達し、イギリスとハンザ
の商人はほとんどこの市を離れた。このような情況の中
で、七九年、アントウェルペンがフランドル、ブラバン
トの大半の諸都市とともにユトレヒト同盟に参加したこ

とは当然であつた。

以上みたように、アントウェルペンの国際市場機能の
動搖がこの市の市民と、この市と關係をもつネーデルラ
ント諸都市の市民の経済的逼迫の大きな背景をなしてお
り、市民の経済的窮迫と不満はスペインの統治に対する
叛乱に油を注ぎ、独立運動のエネルギーへと転化したこ
とは否定できない。このようにみえてくると、国際市場ア
ントウェルペンの繁栄をその根底から崩壊せしめネーデ
ルラントの経済に打撃を与えた大きな要因としての地中
海商業の復活という事実には、われわれの関心を向けなけ
ればならないであらう。

オランダがいまだに独立に向つて苦闘している最中、
この国はふたたび地中海と深い関わりを持った。すなわ
ち一五九〇年ごろ、オランダ、イギリス、ドイツ、ハン
ザは突如としてイタリアへの穀物輸入を開始し、とりわ
けオランダ商業はイギリスとハンザを抑えて大発展を遂
げ、やがてレヴァント貿易に進出し、イタリア諸都市を
圧して地中海商業を征覇したのである。⁽⁹⁾一六〇〇年ごろ、
オランダは、イギリス、ハンザとともに、バルト海、ス
カンジナヴィア、北海の経済圏とイベリア半島、地中海

市場を結びつけ、同時に植民地貿易をとり入れつつ、国際経済の重心を大西洋あるいは北方へと決定的に移動せしめたのである。⁽¹⁰⁾ 以下本稿では地中海商業の復活について述べたい。

二 地中海商業の復活

一四九八年、バスコIIダガマがインド洋を越えてカリカットに到着して以後、胡椒貿易の新たな担い手として登場したポルトガル商人はたちまちのうちに、ヴェネツィアを拠点とするレヴァント貿易を圧倒し去り、以後、商港リスボン、間もなくアントウェルペンが胡椒貿易の中心市場となったとされる。事実、早くも一五〇一年にはポルトガルの香料船がアントウェルペンに到着し、続いて一五〇三年には五隻の香料船が胡椒三六〇トンを積んでイギリスのファルマスに入港した。同年、南独のウエルザー、フェーリンがリスボンにひき寄せられ、同じ年ポルトガルの胡椒はジェノヴァに運ばれる。同じく一五〇三年からアントウェルペンのポルトガルの胡椒の流入は連続的に行われ、一五〇四年には二千カンタル、一五〇八年―一五一〇年には年平均四千カンタル、続く

数年には八千カンタルの量に達した。他方一五一〇年アレクサンドリアから直接アントウェルペンに入港した胡椒船を最後に、暫くのあいだヴェネツィアからの胡椒流入はストップした。⁽¹¹⁾

ポルトガル王室はアントウェルペンに、一四九九年、商務館を置き、一五〇八年にはリスボンの casa da India の支店 Feitoria de Flandres を設けたが、ポルトガルの胡椒貿易がアントウェルペンにおいて、南ドイツの大金融資本と彼らのもたらした商品、銀、銅と結びつくことができたところに、ポルトガル胡椒貿易成功の理由があり、アントウェルペンが十六世紀最初の四半世紀において、西ヨーロッパ最大の胡椒市場として登場した理由⁽¹²⁾がある。いまやポルトガルの胡椒はアントウェルペン市場を経過してドイツ、バルト海、イギリスを初めとして、リヨンからマルセイユへと広がりつつあった。アントウェルペンにおけるイタリア商人の勢力は縮小し、代って南ドイツの巨商たちの全盛時代が現出し、フッガー家の資本は一五一一年から二七年において実に五四・五パーセントの成長を実現したのである。⁽¹³⁾

とはいえ、イタリア諸都市なかんずくヴェネツィアの

レヴァント貿易は最終的に消滅し、ヨーロッパ経済の重心は地中海から決定的に大西洋地域へと移動したのではなかった。「過去三、四十年間におけるヴェネツィア経済史の研究は(その)決定的没落の時期を十六世紀初頭から十七世紀初頭へと遅らせた。ポルトガル人はヴェネツィアの繁栄を最終的に打ちこわさなかった。それを為した咎まれあるいは責めは、リスボンとアントウェルペンよりもアムステルダムとロンドン、つまりイギリスとオランダという西北の海洋国民に帰せられるべきである。」⁽¹⁴⁾

ヴェネツィアの胡椒貿易が十六世紀の前半におけるきびしい危機を乗り越えて、世紀中葉から復活したことを最初に主張したのはフレデリック・レーンである。⁽¹⁵⁾ 彼はヴェネツィアの商船に長型のガレー船と丸型の帆船の二種あり、十六世紀になると前者に代って、後者が主力を占めたことに注目する。前者は細長くて低く、漕手が乗り、速力が早く、元来戦闘のための船であったが、商船としては大型のガレー船がもっぱら胡椒や香料を初めとする軽量高価な独占商品の輸送すなわちレヴァント貿易と西方への輸出に使用された。後者は幅広くかつ重く、速力はないが安定して嵩荷輸送に適し、もっぱら穀物、

ブドー酒、オリブ油、木材などの近距離輸送、漁船に使用された。最盛期(一四二〇—一五〇年)のヴェネツィアは平均百トン三百隻の丸型商船(そのうち三〇—三五隻は二四〇トン級の遠隔地貿易用)を所有したが、世紀後半にその数は半減し、二〇隻のガレー商船隊が活躍した。しかしながら、十五世紀後半、丸型の商船は一本マストから三本マストへと改良されて機動性を増し、大砲の発達は低いガレー船より高い丸型商船に装備しやすく、その結果著しく防禦力をたかめた。ガレー船は国営造船所(Arsenale)で、丸型船は個人の造船所で建造されたが、一五〇二年、ヴェネツィア政府は丸型商船の商品輸送規制を緩和し、運賃の最低料金を定め、船舶税を軽減し造船業者に奨励金を交付する法律を定めた。この法律によって丸型商船の建造が促進され、ヴェネツィアの海運力は復活した。ポルトガル、スペインの植民地貿易はガレー商船隊を衰運に陥れ、殆ど消滅させたに反し、両国の商船が大西洋にその主力を移し、地中海から退場したことは大型の丸型船によるヴェネツィア海運に有利に作用し、世紀中葉には丸型商船のトン数は二倍になった。一五一四年にはガレー船隊による香料輸送の独占が廃止さ

れて丸型商船も使用されるようになった。レーン教授によれば、従来、ヴェネツィアの商業といえは国営のガレール船隊のみが知られているため私人の所有になる丸型商船に注意が向けられなかったのである。かくして彼は世紀中葉におけるヴェネツィア商業の復活を指摘し、その後の諸研究は種々の側面から彼の問題提起を確認したのである。⁽¹⁶⁾ 彼はまた一五六〇—一六四年においてアレクサンドリアから輸出された胡椒の量(年平均一、三二〇、四五四ポンド)がポルトガル胡椒流入以前の平均よりも多かったことを、ヴェネツィア商業復活の傍証としたが、続いて発表した論文においてヴェネツィアの胡椒貿易を取り上げた。⁽¹⁷⁾ 彼はこの論文で世紀中葉エジプトに赴いたヴェネツィアの若い貴族 Alessandro Magno の日記に見える当時のアレクサンドリアとカイロの貿易事情についての記述や、ローマに駐在してレヴァント貿易事情の情報を集めているポルトガル領事 Pires de Távora の本国への報告などから、一五六〇年ごろ、エジプトからの西方向け胡椒輸出は十五世紀末のそれよりも多いと推定する。つまりインド洋から紅海を通過する胡椒はポルトガルの輸入量と同量内至うわ回っているのである。

一体いかにしてそれほど多量の胡椒がレヴァントを経由してヨーロッパに流入しえたのかとレーン教授は問ひかけるが、次章で述べるように、これらの問題について、地中海世界を軸として、一方東南アジアの原産地からインド洋、他方で大西洋と北海、バルト海さらに新大陸にまでまたがる広大な地域を視野に収めながら詳細に論じたのはフェルナン・ブローデル教授であろう。⁽¹⁸⁾ アントウエルベン市場についてすぐれた研究を発表したベルギーのファン・デル・ヴェー教授によれば、アントウエルベン経済の発展は十六世紀最初の四半期のブーム現象ののち、一五二一—一五〇年にかけて困難な時期を迎えるに至った。⁽¹⁹⁾ 南欧貿易、イギリス毛織物貿易の隆盛、金融業の繁栄、後背地における毛織物業と農業の復活などがこの市の経済の一層の発展を約束したが、それと同時に、とりわけ三五年以後、前述したアントウエルベンの商業を支える三つの柱を徐々にしかし確実に掘り崩す危機的な傾向が進行していた。すなわち、アントウエルベンがヨーロッパにおける胡椒取引の独占市場にならなかったことである。一五二一年、カール五世とフランソワ一世のあいだに再開された戦争は、主としてイタリ

アを舞台に争われたが、戦争はアントウエルペンにも大きな損失をもたらした。ネーデルラントとフランスとの通商はしばしば禁止され、アントウエルペンからリヨンへの胡椒の輸出は困難になった。アルプスを越えて流入するヴェネツィアの胡椒がふえ、一五二五—二六年にはリヨンへの胡椒輸入量の五一、八四%を占めるに至った。アントウエルペンがフランスとの敵対関係にあったためにその胡椒がフランス市場を把握しえなかつたに反して、この時期にレヴァント貿易は一進一退を繰り返しているものの、四〇年代に入るとその胡椒はマルセイユを重要な中継地として、そこからリヨン、トゥールーズ、ルーアン、ポルドーにまで進出して、ポルトガル胡椒と競合し、ついにはアントウエルペンの胡椒価格にまで影響を与えたと云われる。一五三九年トルコ皇帝スレイマン一世とフランソワ一世の間に協定が成立し、マルセイユの商人はレヴァントから直接に胡椒を入手したからである。

四〇年代以降、ポルトガルは胡椒の販売地をアントウエルペンからリスボンへと徐々に移してゆき、四八年には商館を引き上げた。

このようにして、アントウエルペンにおけるポルトガ

ル胡椒の独占市場はレヴァント胡椒の挑戦と政治的事件に妨害されて僅かの間に崩壊したのである。

三 ポルトガルの胡椒独占の失敗

前章において、アントウエルペンがヴェネツィアのレヴァント胡椒による挑戦に遭って独占市場となりえなかつたと述べたが、ブローデル教授によれば、それは究極のところ、ポルトガルがインド洋における胡椒独占に失敗したこと、つまり広大なインド洋、アラビア海における完全な制海権を掌握することができなかったことによるのである。⁽²⁰⁾一五一〇年から一五年にかけてアジア海域におけるポルトガルの攻撃は、絶頂に達した。ポルトガル船隊は一〇年にはゴアを征服し、翌年マラッカを陥し、一五年には紅海の入口にあるソコトラ島とペルシャ湾の要衝オルムス海峡を占領したのである。⁽²¹⁾

胡椒が東南アジアからレヴァントへ流入する経路は二つあった。まず東南アジアからインド西岸に運ばれた胡椒はアラビア商人によって買い付けられ、ペルシャ湾か紅海に向い、紅海に入った胡椒はHoroで陸揚げされ、隊商によって砂漠を横ぎり九日乃至十日でカイロに到着す

る。カイロに着いた胡椒を更にアレクサンドリアに運ぶのはユダヤ人、アラビア人の卸商人である。十六世紀後半になると、ヴェネツィア商人はこれらの仲介利潤を排除するためにカイロに進出して隊商と直接取引をした。⁽²²⁾

他方インド西岸の港を出発してペルシャ湾に向った胡椒がバビロニアから隊商によって運搬される終着点はアレップである。ここでもヴェネツィア人はトリポリ、ダマスカスでの取引をアレップに移そうと努めたのである。

東南アジアと地中海を結ぶこの二つの経路はアラビア人により確立され、すでに数世紀にわたって東洋の胡椒、香料、絹、陶器、宝石と引き代えに、ヨーロッパの銀、毛織物、銅、鉄器、紙、絹織物、珊瑚、琥珀、貨幣、スーダンの金、エジプトの阿片、地中海のサフラン、明ばん、紅海の茜、水銀が東へ流れていたのである。

ポルトガルがこの経路を絶って西欧への胡椒輸入を独占するためには東南アジアからインド洋、アラビア海域でその根源を絶たねばならなかった。しかしながら、密貿易を防ぐために、広大な海域を監視するための要塞と船隊とそのため要員を確保するのは極めて困難であり、かつ莫大な費用を要する。ポルトガルはこの費用を捻出

するための関税制度を設けたが、関税役人は賄路をとってアラビア商人の密貿易を黙認するという結果になった。⁽²³⁾

レヴァントにおける政治情勢がポルトガルの胡椒独占に一層大きな困難を与えた。この時期におけるオスマン・トルコの勢力の伸展は目覚ましく、一五一六年にはシリアを、一七年にはエジプトを、三四年にはイラクへとその勢力を拡大した。トルコとペルシャは当時イスラームの二大勢力であったが、トルコと敵対するポルトガルはペルシャの支持を受ける必要があり、そのためにペルシャとインドの交通を認めなければならず、その結果、西インド——ペルシャ湾——シリアのルートに手を触れることができなかったのである。

前述したように、一五一〇年代まで、インド洋へのポルトガル艦隊の出撃はまことに目覚ましく、トルコ側はポルトガルの防備の弱点を突こうといろいろ劃策するが、成功しなかった。一五三八年スレイマン一世の艦隊はアデンを占領し、さらにインド西岸グジャラト半島のディウを攻撃したが、占領することはできず、紅海とペルシャ湾でポルトガルの艦隊と戦って破れた。五三年以後、両者のあいだの緊張関係が緩和したとき、この緊張緩和

がレヴァント貿易に有利に作用した。プロードルはこれをレヴァント貿易盛行の始まる時点と考⁽²⁴⁾える。

プロードルはさらに東南アジアに関する最近の研究の成果に基づき、つぎのように考⁽²⁴⁾える。すなわち、東南アジアにおけるポルトガル人の、あくどい買いたたきにみられるような強欲で見通しのない行動は現地人の反感を招き、香料諸島の香料、品質の良いジャワの胡椒、さらにセイロンのシナモンさえ、マラッカに運ばれず、ジャワ人のジャンクでスマトラ西部のアチエへと運ばれるようになった。一五八〇年代、ポルトガルの統制下にな⁽²⁵⁾いアチエ市場にはイスラーム商人の商船が多数来港するようになった。十七世紀初頭になると、アチエは多数のトルコ商人が集集して、いよいよ繁栄したばかりでなく、インド、シナ、インドシナに向けての販売市場となり、その結果は希望峰を廻って帰航するポルトガル商船の積荷を減少せしめることになった。かくして、地中海貿易の隆盛を説明するものはポルトガル人の未熟さとイスラーム人の賢明さ、後者の胡椒貿易に有利に作用した、マレー半島にまで達するイスラーム世界の拡大、ということになるであらう。

要するに、十六世紀は大西洋とレヴァントを經由する胡椒貿易の何れもヘゲモニーを得ることができず、対立する両ルートとも危険で不安定な状態に置かれ、トルコ対ポルトガル、トルコ対ヴェネツィア、トルコ対ベルシヤのあいだに戦争が繰り返されるたびに重心は、あるいは大西洋に、あるいはヴァレントに傾むいたようである。大局的にみて一五七〇年以降ポルトガルの胡椒輸入は増大し、しかもこの胡椒が地中海市場に向った。地中海市場におけるこの胡椒をめぐる掌握をめぐってポルトガル国王とヴェネツィア、あるいはトスカナ大公、さらに南ドイツ商人の複雑なかけひきが行われたのである。一五八〇年ポルトガルを合併したフェリーペ二世はいまや新大陸と東インド貿易をリンクしようとするが、彼の計画はインド洋よりも大西洋の海岸でより手強い抵抗を受けた。フェリーペ二世は反乱下のオランダ人とイギリス人の私拿補船、ベルベル人の海賊船に対処するため、むしろトルコとは休戦状態を続け、また輸入胡椒の販売を危険な北海から地中海へ向けるように努力したのである。一五八〇年以後もレヴァント貿易は活潑に行われた。しかしながら、まず、九〇年代に入るとオランダ人、イ

ギリス人がイタリア貿易に進出し、やがてレヴァントの港に到着し、ヴェネツィア貿易に打撃を与え、一六二〇年代に至れば、オランダの東インド貿易が、胡椒、香料の生産地を完全に掌握するのみならず、ベルシャとアラビアの海域と海岸を完全に抑え、ライデン産の織物で満たした。イギリス人とフランス人がオランダ人に続き、この海域は第二のヨーロッパ人進出の時期を迎え、ここにレヴァント貿易は最終的に破壊されたのである。

四 むすび

最後にオランダのイタリア商業について簡単にのべてい。一五八五年、アントウェルペンはスペイン軍の猛攻のまゝに屈服した。アントウェルペンの商人は四散し、数年ののち、アムステルダムがアントウェルペンの地位を継承して世界市場にのし上らんとする形勢を敏感に看破して、この市に蝟集した。⁽²⁷⁾これらの国際的大商人の来住は巨大な資本と商業知識ととりわけイベリア半島、イタリアの取引関係を伴い、いまやバルト海を基盤とするアムステルダムは一挙に世界市場と呼ぶにふさわしい性格を帯びるに至った。その時、イタリアの穀物不足が伝

えられ、アムステルダムの商人は流入した大資本と商業知識に支えられてイタリアに穀物を輸入する。⁽²⁸⁾イタリアは八六年以後、不作が続き、九〇年、九一年に至って飢饉は絶頂に達し、トスカナ大公はダンツィヒに救援の使節を送った。アルノ川の土砂の堆積で衰えたピサに代って、トスカナ大公が建設した自由港リヴォルノに向けて、オランダ、イギリス、ハンザの穀物船が殺到し、九三年には北方からの小麦とライ麦の輸入は一万六千トンに達した。リヴォルノはジブラルタルから一週間の距離にあり、この海峡からの風の方向がこの港への航路と一致していた。加えて、この港は、トスカナ大公すなわちメジチ家の巨大な資金をバックにしていた。北方の船はリヴォルノで明ばんを、さらにスペインの港に寄港してワイオン、干しブドー、オリブ油、果実などを返り荷にした。穀物貿易の利潤は初期には三百パーセントにも達したといわれるが、およそ十年ほど続いたのち、イタリアの食糧危機は平常に戻った。出航するや北海でイギリス私拿捕船に襲われるオランダ船は、中立国のバスポート、ハンザの船籍証明書などを用意して難を切り抜けるが、ドーヴァーを過ぎると早くもスペイン側の海上拿捕戦に苦

しまされ、ジブラルタル海峡を過ぎるとヘルベル人の海賊に悩まされた。のちには、オランダ船は船団を組み砲を積み、巡速艇に先導させた。オランダ人の船主はまた共同計算、持分制、保険などによって危険に対処したのである。

- (1) ネーデルラントンの反乱とその過程については、栗原福也「ネーデルラント連邦共和国」岩波講座『世界歴史』一五巻七九—一三九頁参照。
- (2) 聖像破壊運動を失業、食糧費高騰などの経済恐慌と関連付けて説明したのは、E. Knutler, *Het Hongerjaar 1566*, Amsterdam, 1901 p. 49. * 4 Van der Wee, *The Growth of the Antwerp Market and the European Economy*, The Hague, 1963, vol. 2, pp. 232—236 を参照。
- (3) H. van der Wee, op. cit., pp. 209—213.
- (4) J. A. van Houtte, "Handel en Verkeer", *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, vol. IV, pp. 158—166. 著者栗原福也「世界市場のトリスナラントの成立とオランダ経済の特質」『社会経済史学』三十三卷一—三三—三六頁。
- (5) O. de Smedt, *De Engelse Nattie te Antwerpen in de 16^e Eeuw*, Antwerpen, 1950, vol. 1, pp. 246—268.
- (6) M. Sanudo, XI, colonnes 530—1, 7 aout 1530, dans

F. Brandel, *La Méditerranée et le Monde Méditerranéen à L'époque de Philippe II*, Paris, 1966, tome 1, p. 516.

- (7) F. Brandel, op. cit. pp. 454—458.
- (8) O. de Smedt, op. cit. pp. 346—355.
- (9) J. H. Kernkamp, *Scheepvaart en handelsbetrekkingen met Italie tijdens de opkomst der Republiek, in Economisch-Historische Herdrukken, Zeventien studien van Nederlanders*, ed. by Het Nederlandsch Economisch-Historisch Archief, The Hague, 1964, pp. 199—234.
- (10) 前掲拙稿参照。
- (11) H. van der wee, op. cit. pp. 127—130.
- (12) *Ibid.*, p. 125.
- (13) *Ibid.*, p. 131.
- (14) B. Pullan (ed.), *Crisis and Change in the Venetian Economy in the 16 th and 17 th Centuries*, London, 1968, pp. 20—21.
- (15) F. C. Lane, *Venetian Shipping during the Commercial Revolution*, American H. R. Vol. XXXVIII (1933), in *Crisis and change in the Venetian Economy*, pp. 22—46.
- (16) トンタンの編集した十掲書に含まれる八篇の論文は何れも、トーン教授のナーヤを基礎としてゐる。
- (17) F. C. Lane, *The Mediterranean Spice Trade:*

Further Evidence of its Revival in the Sixteenth Century, in American H. R. Val. XLV (1940), in Crisis and Change in the Venetian Economy, pp. 47—58.

- (81) F. Brandel, op. cit. pp. 493—516.
(91) H. van der Wee, op. cit. p. 143.
(92) F. Brandel, op. cit. pp. 495—6.
(12) H. van der Wee, op. cit. p. 129.
(22) F. Brandel, op. cit. p. 498.
(23) F. Brandel, op. cit. p. 496, F. C. Lane, The Mediterranean Spice Trade, in Crisis and Change, p. 56.

(24) F. Brandel, op. cit., p. 495.
(25) F. Brandel, op. cit., pp. 515—6. なき、原産地における買いたたきの結果、品質の良いものは他のルートに流れたので、ポルトガルの胡椒は品質が悪く、しかも航海中に、香りを生命とする香料、胡椒の香りが失われたと言われる。従来、ポルトガル胡椒の値段はレヴァント胡椒に比べて圧倒的に安値だったとされたが、レーンおよびブローデ

ルは両者の値段にほとんど差がなれことを主張する。その理由として、東インド航海の危険による難破が多かったこと、他方レヴァント貿易はレヴァントにおける胡椒の仕入値は高いが、レヴァント—マニラ間の航海が比較的安価であること等を他をもちき。F. Brandel, op. cit., p. 514, F. C. Lane, 'National Wealth and Protection costs', in War as a Social Institution: the Historian's Perspective, ed. J. D. Clarkson, New York, 1941, pp. 36—40.

(26) F. Brandel, op. cit., pp. 506—10.

(27) 前掲拙稿四二頁以下参照。

(28) 北欧諸国のイタリヤへの穀物輸出について、F. Brandel, op. cit. pp. 567—578, J. H. Kernkamp, op. cit., F. Brandel et R. Romano, Navires et Marchandises à L'entrée du Port de Livourne (1547—1611), Paris, 1951を参照。

* 本稿は昭和四十九年度科学研究費補助金(総合研究(A))による研究成果の一部である。

(東京女子大学教授)